

父親の療養きっかけ、田村さん夫妻

三朝温泉に湯治宿

きょう開業

三朝町の三朝温泉に新しい湯治宿が8日、開業する。父親の病気をきっかけに、三朝温泉の泉質の良さを目の当たりにした米子市出身の男性が10年間の夢を温め、ようやく実現にこぎつけた。「三朝温泉にほれました。多くの人に体感してもらって良さを分かってもらいたい」と意気込んでいます。

開業するのは田村博文さん(57)、万里子さん(55)夫妻。2000年に廃業した温泉旅館「松の湯」を、湯治客専用で全面改修した。宿名は「ゆのか」で、「湯につかってのっかり(ゆったり)」



韓国産の黄土で作った岩盤浴と湯治宿を開業する田村さん夫妻

してほしい」との思いが込められている。改修で最も力を入れたのは岩盤浴。韓国から職

ラドン充滿の岩盤浴充実

人を呼び寄せ、韓国産の黄土で作った。寝転ぶと体が温まり、室内にはラドンが充滿。飲泉もできるなど、ラドンの効果を最大限に生かした構造になっている。

部屋数は6〜10畳(1〜2人)が10室。畳敷きの和室にベッドがある。自分に合った食事が取れるように、1階と2階に自炊ができるスペースを設けている。

博文さんは、今年3月まで県内の有線放送会社に勤めるなど、主に映像関係の仕事に携わってきた。脱サラで畑違いの道を歩むことになるが、湯治宿経営に至ったのは父親の浩さんの病氣治療から。

10年前、浩さんは余命半年と宣告された。手術後、歩くのもやっとの状態となり、三朝温泉で10日間、湯治したところ見違えるように元気になった。その後も湯治を続け、2年後に71歳で亡くなった。湯治のたびに「こんな極楽はない」と言っていた父親の姿を見て、博文さんらは「湯治宿をしたい」と本気で考えるようになったという。

宿にはカフェスペースも整備。料理人になりたかったという博文さんのもう一つの夢の実現と、栄養士と調理師の資格を持つ万里子さんの腕を生かす。カフェは当面、昼間のみの営業を予定している。

博文さんは「できるだけ安上がり体に休める場所をつくりたかった。期待と不安が入り交じっているが、多くの人に三朝温泉の良さを知ってほしい」と話している。

(吉浦雅子)